



みつや交流亭前にて

「ごった煮の味、オンリーワンの花盛りのような街やと思います」。隅から隅まで駆け回る淀川区をそう表現するタウン誌「ザ・淀川」の編集長・南野佳代子さん(63歳)。27年間毎月発行し続け、地域社会の活性化や文化・教育の振興に努めている。昨年は大阪市民表彰(文化功労部門)を受章。「何も無いところから何かを生み出していく喜び」を励みに、一人で何役もこなすパワーの塊のような人だ。

#### フリーペーパーの先駆者

「ザ・淀川」はB5判・48ページのフリーペーパーである。毎月9万部発行し、淀川区の各家庭や公共施設などに配布。イベントで楽しむ子どもたちや地域活動に取り組む人や外国人、行政のお知らせ、赤ちゃん・ペットの自慢まで、にぎやかに紹介されている。

創刊は1981年5月。結婚を機に、たまたま淀川区に住んだものの、ひとりの知人もいない。「だからこそ、未だ見ぬだれかに、手紙を出すような気持ちで原稿を書きました」

それまで大阪府関連のPR誌の編集記者などを経験しており、ノウハウは持っていた。取材も編集も営業も一手に引き受け、何日も徹夜して完成した創刊号。「住所と電話番号が抜けていて、慌ててゴム印を押して配った(笑)。でも予想以上に反響があり、当初10数万円だった広告収入が毎月増えていった」

#### コンセプトは“地域も地球も”

紆余曲折を経ながらも「できるだけキメ細かく地域の情報を」という姿勢は変わらない。地球規模の話題も積極的に取り上げる。「草の根的な活動を大事にしています」

4月から、市内296小学校区を対象にして、地元

住民に編集長・発行人になってもらう月刊ミニミニタウン誌「ご近所ネット」(B5・4ページ)をスタートさせた。「教育コミュニティの大切さ」を痛感しての企画である。

内容は各編集長の采配で、自由に編集してもらう。紙とネットの両媒体を融合し、広告に携帯電話からネット接続できるQRコードを付けるなどの工夫も。「4月に出たのは地元淀川区の3誌と都島小学校の1誌ですが、市内全小学校区で発行できたら、大阪市が変わるんじゃないかな」と期待する。

#### すべて自分の栄養に

今でもカメラを持って取材に回り、編集も営業もこなす。二人の娘が幼い頃は、自転車の前と後ろに乗せて走り回っていた。「しんどいことは数えきれないほどあった。休日や夜の取材、会合などは、行く直前まで足が鈍ることも多い。でも、現場に着くや来てよかった、来なければ、この話は聞けなかったし、この人に出会えなかったと思う。自分の人生が豊かになった気がします」

人との交流で得られる心の充足感が、活動の幅をどんどん広げていく。昨年8月には商店街の空き店舗を利用して誰もが気軽に立ち寄れる交流拠点「みつや交流亭」の開設にも奮闘した。「情報は人を動かす力がある。ささやかな力ですが、タウン誌を通じて、少しでもまちを変えていきたい」

まちづくりは、一途に一生懸命になる人がいないとコトが始まらない。人と人のつながりを大切に、市民の目線で、まちづくりに取り組み続ける覚悟が伝わってきた。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

# 経営は厳しいけれど、 出合い、交流が私の財産

## プロフィール

「ザ・淀川」編集長

みなみのかよこ  
南野佳代子さん



大阪府堺市生まれ。商社勤務ののち、海外で3年半暮らす。帰国後、大阪府関連のPR誌の編集記者を経て、1981年に淀川区のタウン誌「ザ・淀川」を創刊。89年にNTT全国タウン誌フェスティバルで「タウン誌大賞奨励賞」受賞。99年に大阪市「きらめき賞」、2007年に第42回「大阪市民表彰」受章。淀川フォーラム実行委員会委員、淀川区未来わがまちビジョン推進委員、淀川区アクションプラン推進委員、NPO法人伝統文化みおつくし倶楽部理事、大阪市視聴覚ライブラリー教材選定委員、大阪市社会教育委員など多方面で活躍。

## みつや交流亭 5月・6月の主な催し

### モンゴルの調べ 5/16(金)18:30~

内モンゴルからの留学生と、その父親で、“人間国宝”級といわれるジンバさんによる、モンゴル音楽の夕べ。

### エコ・防災をキーワードに考える商店街振興 5/30(金)19:00~

大阪船場生まれ「早稲田エコステーション研究所」代表研究員・藤村望洋さんの講演。

### 世界にはばたくRAKUGO 6/7日(土)19:00~

阪大の博士課程留学中のトルコ人、我楽亭(わらってい)ハイトさんの独演会。演目「幽霊の辻」「おしゃべり往生」

みつや交流亭 <http://plaza.rakuten.co.jp/kouryutei/> 〒532-0036 淀川区三津屋1-4-29 050-1505-8627